宮崎 充保先生に捧ぐ

宮崎 充保先生は1949年のお生まれで、一橋大学経済学部のご卒業です。卒業後は、久留米大学附設中学校の教諭を６年間務められ、その後、九州大学大学院に進み、同大学文学部助手を務められました。

山口大学に赴任されたのは、1981年春のことです。当時は教養部があり、入学したての学生達に一般教養の英語を主に教えていらっしゃいました。現在とは違い、和やかな雰囲気の漂う職場で、先生も思う存分、英語の教育・研究に励まれていたことと思います。先生の研究室は、いつも夜遅くまで明かりが灯っていました。

その後、全国的な教養部の改革に伴い、1996年に先生は宇部市にある工学部感性デザイン学科に異動されます。芸術の分野、とりわけ文学、映画、音楽の分野において造詣が深い先生は、文理融合的なこの学科で、専門性を活かした指導を行われました。次第に大学という場に厳しさが増していく頃です。工学部という理科系の環境、時間のかかる通勤のこともあり、ご苦労も多くあったことと思います。その後、2001年には現在の職場である、経済学部の観光政策学科へと異動されています。

宮崎先生の授業について感想を学生達に尋ねると、厳しいけれども充実した授業だという答えが返ってきます。以前､宮崎先生が添削した学生のレポートを見せて頂いたことがあります。レポートには赤い文字が所狭しと並んでいました。この添削にいったいどれだけ多くの時間を先生は割かれているだろうかと、いつも驚いておりました。

山口大学には、英語の教員で構成された英語分科会（現在の英語部会）というものがありました。宮崎先生はそこで分科会長や時間割係という神経を使う重職を担いました。また同時に、共通教科書を執筆されたことは、英語分科会への最大の貢献の一つと言えるでしょう。2002年、大学が英語教育の柱にTOEIC®テストを導入して以降､共通教育の１年生用の教科書（成美堂）を併せて３冊、お一人で書かれました。それは教科書本体だけでなく、指導マニュアル、そしてオンライン課題教材にまで及び、教材の量としては膨大なものでした。TOEIC®に不慣れな教員にとっても、どれだけ心強い支えになったか、簡単には言い表せません。経済学部の多くの学生達は、さらに学部の専門授業でも指導を受けています。経済学部における英語教育の体制は

先生が構築されたものです。TOEIC®テストの一定スコア取得を卒業要件としたプログラムは学生達の英語学習に大きな動機を与えてきました。

一方、山口大学在職の33年の間、宮崎先生は実に多くの要職に就かれました。とりわけ、2004年から４年間、大学教育機構の国際センター長（現、留学生センター長）をなさっていた間は、海外の大学とのつながりを構築することや留学生の学業環境の充実に大いに尽力されました。

こうした学生指導や学内の業務を支えてきたのが、きっと先生の研究活動であろうと思います。先生が職場で外国人のかたと英語で話すのを耳にすると、その流暢さに心底、圧倒されます。どうしてそのような円滑なコミュニケーションが図れるのですかと尋ねると、先生は「いや、苦労しているのですよ」とおっしゃいます。相手のかたと楽しく話していらっしゃる姿を思い返してみると、「外国人だとは思っていないのです」というまた別の言葉も浮かんできます。

先生の主要業績表からは、現在に至るまで、先生の主要な研究対象が日本の文学作品の英語への翻訳ということがわかります。ある時点で言語学、英語学プロパーの研究から、さらに実りの多い実践的なものとしての翻訳行為への移行を決断されたと伺ったことがあります。最近はずっと山本周五郎の作品に没頭されているようです。日本語が写し出す時代性と英語が写し出す時代性をどのように符号させるか、腐心されていたことと思います。2009年に山口県萩市の松陰神社宝物殿に展示される吉田松陰ゆかりのさまざまな物品に付された解説文の英訳を担当なさったとき、なかでも松陰の残した短歌の部分にこだわっておられたことを思い出します。その仕事も膨大な量のものだったのですが、文献をさっさと英語に仕上げていくその英語力に、ただただ驚きを禁じ得ませんでした。こうした翻訳作業に伴う大きな苦労は、翻訳行為の生み出すそれと同じか、それ以上の悦びによって、バランスが取れていたのではないかと、甚だ僭越ながら想像しております。

ご自分のことは一切後回しにして、周りの人々のことを第一に考えるそのお人柄は多くのかたがご存知でしょう。先生に対しては、実に多くの学生達、教員達が今も感謝していることと思います。今回、このご退職記念号には宮崎先生に捧げる６本の論文が掲載されています。この紀要の先生がたが日頃から抱いている感謝の気持ちを込めて、この退職記念号を宮崎先生に捧げたいと思います。

（文責：正宗 聡）